2028･デヴュー50 周年に向けて

子供の頃から、音楽と映画が自分にとって学校だった。教室での先生の教えより、家庭での親達の躾より、人はどうやったら自由で心豊かに生きていけるか?をジョン レノンの歌詞や、黒澤映画から学んだように思う。と同時に文化･芸術の持つ意味と無限の影響力を知った。4 人の兄達の影響で色々なジャンルの音楽を聞き、国内外の様々な映画を観て夢中になった。中学に進み友達と映研を作り、観た作品の感想を書き、パンフ､ポスターそして、ニノ ロータ、エンニオ モリコーネ、ヘンリー マンシーニ等のサントラ盤も収集した。ホームルームでの先生の｢将来の夢は?｣に真顔で｢映画評論家｣と答えた。高校に進み、音研で同級生、先輩とバンドを組んだ。2 年生になるとオリジナルも増え、今も博多の天神にある照和で歌うようになった。卒業と同時にそのアマチュアバンドは自然消滅したが、それでもバイトを転々とし、”いつか又、新たなバンドでプロへの道を!“と夢を持ち続けていた。17〜19 才迄働いたイタリアン レストランでは、マスターから｢もうミュージシャンは諦めて、俺が修行したシチリアに行っておいで!｣と言われた。中々チャンスに出会えなかったということもあって、料理人という人生もあるのかなと段々夢は傾きかけていた時だった。福岡の音楽シーンに多大な功績を残された、元 KBC ラジオのディレクター岸川 均さんから店に電話があった。｢今、東京で新しいバンドが出来つつあるけど、ヴォーカルが決まらないらしい、君オーディションを受けてみないか!?｣この 1 本の電話が運命の大きな分かれ道となった。上京しオーディションに受かり、アレキサンダー ラグタイム バンドのヴォーカルとしてデヴューすることが出来た。最初のアルバムのレコーディングの際だった。事務所の上層部からいきなり｢歌詞に一言も政治的、社会的なコトは入れるな！｣と言われた。始めは耳を疑った。子供の頃から聞いて育った欧米のミュージシャン達の歌は、男女のコト、家族のコト、友人のコト、社会の出来事･･･反戦歌まで 1 枚のアルバムの中で共存していた。プロになったらそうゆう歌を日本語で歌っていきたいと思っていたのだ。それでも、現在でも歌っている[喝!]を入れた。当時、バブルの風が吹き始め世界から経済大国、ジャパン アズ No.1 と讃えられていたが、反面”なんでこんなに自殺者が多いんだ！その元凶はなんだ?”という内容の歌だ。結局、その一件が上層部の逆鱗に触れ 2 年足らずでクビになった。合宿所と称していたマンション、楽器、楽器車全て没収された。その日から、アマチュア時代よりも酷い赤貧生活が始まった。マネージャーも一緒に抜け、メンバーチェンジし、バンド名を A･R･B に改め中古のワンボックスカーに乗り込み、全国のライブハウスを回った。現在のように各地はまだ高速が発達していなかったので一般道路を北から南まで、毎日走った。移動だけでもかなり苛酷なツアーだった。それでも各地のファンが待っていてくれて一緒に歌ってくれた。周りからの枷が外れ、歌いたいコトを歌い、やりたいコトをやっているということが実感出来た。その内、ホールへ移行し、移動も新幹線、飛行機へと変わった。そして、約 10 年という時を経て武道館ワンマンという位置までたどり着けた。ただ、その達成感と裏腹に、自分の中では”限界”という思いが募っていった。色々な理不尽、不条理を歌えば歌うほど茶の間から遠ざかっていく。自分が思うロックミュージックはこの国では無理なのかもしれない。冷静に考えれば、この国のメディアは殆どがスポンサーで成り立っている。やはり、欧米のように個の意見を尊重する成熟した民意や、文化のレベルには到底及ばない。そういった危機感は次第に大きくなっていき、もう全て止めて九州の故郷に帰ろうかな、とま

で思うようになっていた。そんな時だった。ある人の新年会に伺った際、松田 優作さんと出会った。本当に直感的に”今、自分が抱えている問題を聞いて貰えるのはこの人しかいない”と思ったのだ。優作さんが飲んでいらした前に行き、正座して自己紹介した。「何だ?」「今、悩んでいます、相談にのって貰えませんか!?」・・・「分かった、じゃいつか家に来い。」この出会いが、人生２度目の運命の岐路となった。数日後、バンドの資料を持ってお宅に伺った。アマチュア時代から現在迄の経緯を話す間、優作さんは腕を組み話しを聞いてくれた。そして、「お前がやってきた事は間違っていないと思う、だけどこの国は欧米のようにプロデュース機関が確立されていない。だから俺達パフォーマーはセルフプロデュースしていくしかない。」そして、こうも言われた。「ここに土があるとするだろ、この土に穴を掘り、種をまいて水をあげる、芽が出てきたら大事に育む。その作業を毎回毎回、手を抜かずやり続けていくことだ。それを何処かで絶対見てる人がいる、その人が近づいてきた時にハジケレばいいじゃないか!?」と。その話しを聞いた時、何故か気持ちがフゥーと楽になれた。そして、帰り際に「お前、いつか映画で顔と名前を売れ、ミュージシャンとか俳優とか垣根を取っ払って[表現者]として生きていけばいいじゃないか。」それから数ヶ月後、又お宅に呼ばれ渡されたのが、結果優作さんが監督・主演の{ア・ホーマンス}の台本だった。受け取り、目を通していたら「お前、その役をやれ、どうせ芝居出来ないんだからするな。お前がミュージシャンとして培ってきたフィーリング、センス、感性みたいなモノを俺が現場で拾うから心配するな。」その瞬間、殴られるのを覚悟で「では、この映画をバンドを茶の間に売る為の宣伝、プロパガンダと捉えていいですか?」と聞いた。3〜4 秒、優作さんは目を閉じ不穏な空気が流れた。真剣だったとはいえ、やっぱり失礼な事を言った。いよいよ殴られると思ったら、目を開けフッと笑い、「まぁ、それで良いよ」と言ってくれた。それで、本格的な映画の日々が始まった。自分の感性は何も間違っていなかった、と奇しくも映画の現場で毎日実感出来た。普段は優しく温かい優作さんは映画の現場では、本当に厳しかった。それでも、映画のアクティングの重要な基礎を、現場で丁寧に教えて頂いたと今でも感謝している。クランク アップの日、「お前、これからどうするつもりだ?」と聞かれ、「おかげさまで、田舎に帰らずもう一度心新たにバンドを建て直し、歌っていこうという気持ちになれました。」「うん?じゃ俳優の仕事は?」「はい、バンドの合間に自分に出来るようなオファーがあれば、やるかもしれません。」だからその時点では、この先本格的に俳優をやっていこうとは、まだ思っていなかったのだ。その後、２人でよく飲む機会があった。その際、必ず最後に出る話が「何故、合作映画で日本人の役を日本人が出来ないのか!?」だった。「それには大きく３つ理由がある。１つ目は日本人は SAG(米国映画俳優組合)に入れていない。２つ目には、俺達はオリンピック選手のように肉体だけで表現するアスリートじゃないから、英語台詞の問題がある。３つ目は、露骨には見えないかもしれないが、差別や偏見と闘っていくしかないな。」その優作さんの持論には自分も全く同感で共感出来た。そして数年後、あの{ブラック レイン}の大成功に繋がった。大阪、L.A.、N.Y. のロケーションから帰国の度にバーに呼ばれ、本当に嬉しそうに現場の土産話を聞かせて貰った。ある日家に居たら、電話があり「吉祥寺の寿司屋に来い。」という事で出向いた。「お前、好きなモノを飲め。」優作さんはというと、ウーロン茶である錠剤を飲んだ。「それ、何ですか?」「いや、ただのビタミンだよ、今日検査入院から退院してきたんだ。」だから、あの突然の訃報を知るまで、全く病気の深刻さは知る由もなかった。一周忌の法事の際、ご遺族から、「優作は、ベッドの上で米

国からの３本のメジャー作品のオファーがあったことを知っていたのよ。」と聞いた時、どれほど無念だったろうかと、何とも言えない気持ちになった。優作さんは、夢が途切れ、死にかけていた自分をもう一度生き返らしてくれた恩人であり、映画表現の師匠であり、魂の兄であり、世界に誇れるホンモノのクリエィターだった。生前交わした言葉、真剣に一喝された日、そして実際自分に起きた霊的な出来事を総合的に、そして多角的に熟慮した結果、一大決心するに至った。34 才の時だ。一切音楽を封印し、俳優として優作さんが考えていた事を自分なりの方法論で継いでいくという事だ。それから１年半後、奇遇にもＶアメリカという米国での仕事の話が舞い込んできた。ヴィゴ モーテンセン､ショーン ペン、ジャック ニコルソン等錚錚たる俳優陣と仕事することが出来、正に夢のような至福の日々だった。そして渡米する度に、米国の映画人からプロ意識､ショービジネスのノウハウ等多くを学んだ。結果、４作品に参加し、５年という時間がかかったが、SAG の会員に加入出来た。帰国し、優作さんのご仏前にお線香をあげ”おかげさまで、ここまでいけました。”と報告した。最初の解散ライブの野音で、「もし、自分が納得出来るところへ到達したら、再開するかもしれません。」と言った。やっと、その時がきたのだ。その後、約２年間をかけ、声出し、歌唱のリハビリをやり、音楽の封印を解いた。バンド再結成の際には、メンバー、スタッフに幾つかの条件を提示し、確約をとった。全く音楽を聞かない、歌わない 6〜7 年の間に、日本でもテクもパワーもあるカッコ良い、イカしたバンドがデヴューしていた。そんな中、なあなあで同窓会的に、先輩面して出て行くのだけは、絶対に避けたかった。数年が経ったが、残念ながら確約が守られることはなかったので、自分はバンド脱退の道を選んだ。その後は、ソロ ミュージシャンとして[Neo Retro Music]という自分の音楽スタイルを提唱し、最高、最強のミュージシャンに支えられ歌い続けている。２度の人生の岐路でお２人の恩人、岸川さんと優作さんと出会っていなかったら、今の自分はいない。子供の頃に憧れた学校は、ある日自分の生業となった。シンガー、アクターと２つの仕事に携わり続けている。本質に添ったモノ創りを!をモットーに全身全霊で生きてきた 70 年だったと思う。”いつか、海外のステージで歌ってみたい”､”世界中の監督の作品に参加してみたい”と今でも夢を追い続けている、ホンモノを目指して････。2028 年には、おかげさまでデヴュー50 周年を迎える。今年から、１本でも多くのステージで歌っていくつもりだ。その第１弾として、ジャズミュージシャンとのユニットの Jazzy Soul で 2026 年９月 21 日の大阪ビルボード、９月 23 日の東京ビルボードが決定している。第２弾は、2027 年を中心に{歌う!石橋凌〜君の住む街へ〜Around Tour}というタイトルで、ピアノの伊東ミキオとギターの藤井一彦と３人で各地のライブハウスを回る予定で、その前哨戦として 2026 年 10 月 30 日に広島 LIVE VANQUISH、11 月１日に高知 ラ・ヴィータホール、23 日に金沢 EIGHT HALL の３ヶ所を予定している。第３弾は、2028 年にいつものサポートメンバーと共に、デヴュー50 周年の全国各地のホールツアーを予定している。
久しぶりに、又ファンの人達と会い一緒に歌える日を、今から、本当に心から楽しみにしている。
皆さん、会場でお会いしましょう!

石橋　凌